

(3) プレゼンテーション



写真提供 フォート・キンモト

大阪の代表団（総会会場）

ア プレゼンテーションの準備

IOC総会での45分のプレゼンテーションは、IOC委員全員に大阪の招致を示す最後の機会として、強く印象に残るものとするのが求められた。そのため、経験豊富な(株)電通に制作を委託し、招致委員会と大阪市オリンピック招致局とで共同作業を行った。

全体のイメージを形成するために、IOC委員をはじめ、JOC等、各方面の方々のヒアリングを行った結果、大阪が5都市中、第1番目のプレゼンテーションであるため、最後まで印象を持続できるよう、これまでにないインパクトのあるものにすべきであるという意見が強かった。とりわけ、13億人の人口を持ち、国として初めての開催をめざす中国・北京と比べ、なぜ大阪かということを確認するため、大阪の立候補の動機が、オリンピックを通じた世界への貢献と、継続的なオリンピックムーブメントへの参加にあることを強調することとした。

1) プレゼンターとその役割

6人のプレゼンターとその役割は、次のとおり決定した。

- | | |
|-------|---|
| 磯村 隆文 | 招致委員会会長・大阪市長
大阪の代表として主たるプレゼンター |
| 八木祐四郎 | JOC会長
NOCを代表して支援を表明 |
| 遠山 敦子 | 文部科学大臣
政府を代表して支援を表明 |
| 竹田 恒和 | JOC常務理事
自らの経験をふまえ日本の運営能力を保証 |
| 小谷実可子 | アジアオリンピック評議会選手委員会委員長
ソウルオリンピック・シンクロナイズドスイミング銅メダリスト
オリンピックアンとして、また選手代表として、オリンピック村を提案 |
| 梁 美沙 | 大阪市在住、大阪市立阪南中学校3年生、2000年メニューインバイオリンコンクールのジュニア部門優勝者
オリンピック讃歌の演奏とともに、市民・子どもの代表としての期待を表明 |

2) シナリオと映像の作成

プレゼンテーションのシナリオは、大阪のアピールポイントである既存施設のすばらしさと、大阪の "Cocolo" に力点を置いた。また、世界への貢献という観点で、オリンピックスタジアムをトレーニングセンターとして海外の選手に提供するだけでなく、既存施設を活用して、できるだけ早くから開発途上国の選手を招聘するプログラムを始めることを提案することとした。

磯村会長はメインスピーカーであり、大阪のオリンピック招致への思いを十分に語れるよう、何度も打ち合わせを重ね、スピーチに反映した。他のプレゼンターのスピーチも、一旦原案を作成した上で、リハーサルの際に、個人の経験をヒアリングし、その経験を織り込んだスピーチとした。また、小泉首相から、映像によるメッセージをいただいたことは、プレゼンテーションの中で、政府の支援を強調するうえで、大きな意味があった。

ビデオ映像は、ほぼ45分間のプレゼンテーション原稿に対応するものとした。またスピーチの部分においては、原稿のキーワードに合わせて、キャプションを挿入するなど、プレゼンターと映像のタイミングを合わせ、よりわかりやすいプレゼンテーション映像とした。映像の中には、大阪で競技した経験を持つモーリス・グリーン選手、スティシー・ドラギラ選手のコメントを挿入し、運営能力の高さを実証するとともに、ラオスのシリバン選手の、大阪への期待についてのコメントも織り込んだ。

音楽については、招致のイメージ曲であった三枝成彰氏の「2008年の夏」を編曲したものを随所に用い、映像作品のイメージを統一させた。

3) オリンピック讃歌の演奏

梁美沙さんをプレゼンターに決定した理由は、市民・子どもの代表であるとともに、中学生のバイオリンの演奏が、これまでにないインパクトを与えることができるとの期待からであった。演奏については、事前にIOC事務局から、プレゼンターの一人であればかまわないとの許可を得た。マイクなどの技術的な面も心配されたが、特に問題なく、すばらしい演奏が会場の人々に感動を与えることができた。

4) 日本でのリハーサル

プレゼンテーションは、磯村会長が中心となるので、スピーチの内容確認、ビデオ映像との時間合わせ、英語発音の確認等、リハーサルを兼ねて、何度も打ち合わせを行った。

6月21日に大阪で磯村会長、JOC八木会長、22日に梁美沙さんの個別のリハーサルを実施した。また、6月23・24日に東京で、JOCの八木会長、竹田常務理事、小谷実可子さんのスピーチを個人の経験をもとに修正するとともに、リハーサルを実施した。

6月27日には、東京で、猪谷IOC委員にも参加いただいて全体のリハーサルを実施し、万全の準備を整えた。

イ プレゼンテーションの実施

モスクワ入りしたプレゼンターは、7月13日の本番に向けて、連日リハーサルを重ねた。実際の会場を使用した公式リハーサルは、2回にわたって認められた。1回はテクニカルリハーサルで、大阪は7月9日午後2時30分～6時30分の4時間、2回目は本番を想定した前日の7月12日の45分間のもので、午前9時～9時45分であった。


こうしたリハーサルをすべて終え、本番を待つばかりとなった前日になって、IOC倫理委員会



の委員は、プレゼンテーションに参加できないことが明らかにされた。大阪は、猪谷IOC委員が参加する予定で、リハーサルも重ねていたが、猪谷委員が倫理委員会委員であったため、急遽、岡野IOC委員に交代することとなった。

プレゼンテーションの順番は、2000年（平成12年）9月にシドニーでのIOC総会で抽選により決定しており、大阪はトップであった。7月13日午前9時30分、岡野IOC委員を先頭に、プレゼンター5人とアドバイザー4人、さらにオブザーバー50人が総会会場に入場した。梁美沙さんは、バイオリン演奏準備のため、先に入場しており、技術者2人と通訳が、既にステージ裏手のオペレーションブースに待機していた。

報道写真撮影の後、いよいよプレゼンテーションが開始された。1分間の日本紹介のビデオに続いて、岡野IOC委員が代表団を紹介した。最後に梁美沙さんが紹介され、バイオリンでオリンピック讃歌を演奏し、列席のIOC委員等から盛大な拍手を浴びた。プレゼンテーションは10時15分に終了し、質疑応答が行われた。質問は3人のIOC委員からの3問であった。プレゼンテーションと質疑応答の内容は、後述のとおりである。

プレゼンテーションは、英語で行ったが、質問には日本語で回答したため、IOCから候補都市の母国語用に用意したブースを利用し、インターグループの同時通訳者が、日本語と英語の通訳を行った。

質疑応答終了後、サマランチIOC会長から磯村会長にディプロマ（招致活動を完遂した証明）が渡され、その後、登壇した代表団全員がサマランチ会長と握手し、午前10時30分、会場の大きな拍手に送られて退場した。

プレゼンテーション全体の流れ

時間	Split	場面	動き
00'00"	1'06"	オープニング映像 (映像)	岡野委員、「大阪の空撮映像」で演壇待機
01'06"	3'30"	挨拶と紹介 岡野委員	①岡野委員演壇で映像終わりを待つ ②映像終わりで、岡野委員による挨拶(演壇) ③挨拶終わりで、岡野委員がプレゼンターを紹介 ④岡野委員より、梁さんの紹介 ⑤梁さん、演奏はじまりで自席へ
04'36"	2'54"	パフォーマンス 梁 美沙さん	①梁さん、紹介がはじまったら舞台へ ②紹介終わりで梁さん、演奏開始 ③梁さん、演奏終わりで自席へ
07'30"	3'54"	大阪のアピール 磯村会長	①「合同行進」のシーンで磯村会長、演壇横へ移動 ②磯村会長、演奏終わりまで演壇横で待機 ③磯村会長、梁さんを送り出す ④磯村会長、演壇でプレゼンテーション ⑤小泉首相の映像始まりで磯村会長、自席へ
11'24"	1'44"	小泉首相映像 (映像)	
13'08"	2'10"	文部科学大臣 遠山大臣	①「On behalf of the Government...」で遠山大臣演壇へ ②遠山大臣、演壇でプレゼンテーション ③遠山大臣、自席へ
15'18"	2'21"	JOCの保証 八木会長	①「Along with the people...」で八木会長、演壇へ ②終わりで八木会長自席へ※竹田常務理事が着席エスコート
17'39"	4'40"	施設紹介映像 (映像)	
22'19"	3'39"	オリンピック村 小谷実可子さん	①夢洲→交通網映像で、小谷さん、演壇へ ②スピーチ終わりで、映像を少し見て小谷さん自席へ
25'58"	4'50"	大阪の意欲は高い 磯村会長	①映像イメージ ②「くいだおれ」映像で磯村会長、演壇へ ③磯村会長、演壇でプレゼンテーション ④梁さんを呼び込む ⑤磯村会長、演壇横で梁さんを見守る
30'48"	2'23"	オリンピックと私 梁 美沙さん	①映像で「35 TICKETS」がでたら梁さん演壇へ ②梁さん、演壇でプレゼンテーション ③スピーチ終わりで梁さん・磯村会長、一緒に自席へ
33'11"	4'03"	大阪の開催能力 (映像)	
37'14"	2'49"	日本の経験 竹田常務理事 インタビュー映像 (映像)	①「17000rooms」で竹田常務理事、演壇へ ②竹田常務理事、プレゼンテーション ③インタビュー映像開始で竹田常務理事自席へ
40'03"	5'09"	大阪の貢献-映像 磯村会長	①インタビュー映像、テロップ「OSAKA..would put」で 磯村会長、演壇へ ②磯村会長、演壇でプレゼンテーション
45'12"	2'15"	大阪の約束 磯村会長 プレゼンター全員	①会長の合図(日本語)で、磯村会長、プレゼンター席の 全員を演壇へ呼び込み ②スピーチ終わりで、全員一礼 ③映像始まりで、岡野委員を残し自席へ戻り起立待機
47'27"	1'06"	エンディング (映像)	④映像終わりで手を振る、拍手終わりで着席 ⑤岡野委員が終了。コメントQ&Aに備える

プレゼンテーションの内容（スピーチ日本語訳）

（磯村会長）

ファン・アントニオ・サマランチ国際オリンピック委員会会長、理事の皆様、評価委員会の皆様、IOC委員の皆様、ご参会の皆様。

私の今日の目的は、皆様に大阪からのメッセージをお伝えすることです。「大阪はオリンピックを開催する準備ができています！」

梁さんは、この美しい曲を演奏するために、一生懸命に練習をされたはずですが、私たちも、彼女のように、時間をかけ、情熱を傾け、熱心にこの招致を進めてきました。

オリンピックを開催することは、都市に与えられる特別な栄誉であり、都市が世界のために、また将来の世代のために貢献することを可能にする素晴らしいチャンスです。大阪の求めるところは純粹で、政治的な目的は何らありません。私たちは、ただ純粹にオリンピックの理念が素晴らしいと思ひ、それに心酔しているのです。大阪市の、日本の、日本国民の願ひは、皆さんのオリンピック運動が求める、よりよい21世紀への願ひと同じであり、自分たちの進路を無理に変えて皆さんに合わせようとするものではありません。

私たちは1994年に招致の研究を始めました。その結果、2008年には、都市基盤・スポーツ施設が整備でき、オリンピックを迎える条件が整うと考えました。

私はアトランタ、長野、シドニーを視察しました。大阪はオリンピックについて、またオリンピズムについてたゆまなく学んできました。

今、大阪は2008年の準備ができています。私たちは、オリンピック運動に対し最高の舞台を、最高の環境を提供できます。

大阪の招致の理念的な基礎となっているのは、世界のための「スポーツ・パラダイス」を創出したいという願ひです。この言葉を最初に使われたのは、5回も卓球の世界チャンピオンとなった故萩村伊智朗氏です。このコンセプトに基づいた継続的な都市計画の結果、スポーツとオリンピックムーブメントに対する大阪市民の理解と関心が高まり、市民スポーツと国際競技の双方にふさわしい卓越したスポーツ環境ができあがりました。

大阪の既存施設の質は、評価委員会にも高く評価されました。評価委員会レポートによれば、大阪は、オリンピック開催に対する優れた資源を有しているとのこと。大阪の都市基盤、組織能力、経済力も、最も厳しい審査にも十分に耐えうるものです。しかも、大阪のオリンピック招致は、首相がビデオで表明しているとおり、日本国政府の全面的なサポートと保証を得ています。

（小泉首相ビデオメッセージ）

サマランチ会長、IOC委員の皆様、ご列席の皆様。

日本国民を代表し、IOCが世界平和のために努力を続けてこられたことに対し、感謝を申し上げます。

私は、この最も重要な日に皆様とご一緒できないことを非常に残念に思います。現在、日本では、これからの進路を定める国政選挙の最中なのです。

1964年の東京オリンピックの成功は、私たち日本国民に大きな自信をもたらすとともに、日本を世界に認めていただける機会となりました。

大阪でのオリンピックは、世界でも最高水準の都市基盤とスポーツ環境が既に整った日本屈指の大都市で行われることとなります。大阪は、その特色を生かし、21世紀のオリンピックに最高の環境の下で最高の舞台を提供しようとしています。

私は、2008年のオリンピックを歴史に残る最高水準の大会とするために、財政面をはじめとして、あらゆる面において万全の支援を行うことを、日本政府を代表してお約束いたします。私たちは、オリンピック憲章の精神に則り、オリンピックムーブメントのさらなる推進に貢献する所存であります。ありがとうございました。

(遠山文部科学大臣)

サマランチ会長、IOC委員の皆様、ご列席の皆様。

教育とスポーツを担当する日本政府の大臣として、ここに、皆様方の世界平和に対する貢献への敬意と、2008年オリンピックの大阪招致への心からの支持を表明する機会をいただき、たいへん光栄に思っております。

21世紀、ますますボーダレス化が進む社会において、私たちにはグローバルな視点を持つことが求められています。このため、教育とスポーツの分野において、日本は、様々な国際機関との協力によって、国際交流、国際貢献を積極的に進めております。また、日本国民は、スポーツを通じて世界平和の構築をめざす、オリンピックムーブメントの精神に深く共鳴しています。

大阪は、シルクロードを通じて世界に繋がる国際港として、古来より国際交流の舞台となってきました。日本政府と日本国民は、オリンピックが大阪で開催され、世界の国々の人たちの友好促進に貢献する機会が得られることを強く念願しております。

日本政府は、大阪オリンピックを成功させるため、関連するインフラ整備を含め、最大限の支援をしていく所存であり、大阪での開催について何ら懸念のないことをここに保証します。

今、日本国民とともに、大阪でのオリンピック開催を思い描き、胸躍る気持ちです。

ご静聴ありがとうございました。

(八木JOC会長)

サマランチ会長、IOC委員の皆様。

JOCが1997年に大阪を2008年候補都市として選出するにあたり二つの基準がありました。まず、オリンピズムの理解。すなわち、近代オリンピックの精神、原則、そして理想の理解と、その推進に取り組む強い信念です。二つ目は、全体的な計画の実現性でした。大阪はその両方において傑出していました。

100年近い歴史の中で過去にオリンピックを開催した経験からも、大阪のオリンピックが非常に大きな成功を収めるであろうことを確約できます。

大阪のオリンピック招致委員会には、JOCとNFから指導的立場の方々の方が代表が理事会に参加しており、これまで密接に協力してきました。大阪が、開催都市として必要な要件すべてにおいて最高の候補であることを、皆様にはっきりと申し上げることができません。

私の夢は、21世紀の世界を担う子どもたちが、大阪でのオリンピック体験をきっかけに、オリンピズムの火を引き継いでいってくれるのを見ることです。

JOC会長として、私は、大阪で、世界の皆様に、すばらしいオリンピックを開催することを誓います。

（小谷実可子さん）

フレンドリーな顔が見えて、緊張感が晴れました。ありがとうございます。

大阪の選手村計画を作成することにあたり、協力を求められた時、オリンピックとしての経験を生かして、本当に選手中心の村を作る機会を与えられたことを、とても嬉しく思いました。

そこで、私の「お願いリスト」を渡しました。

私は、IOC選手委員会の元メンバーとして、また、OCA選手委員会委員長として、様々なアスリートのニーズを満たすことがどんなに難しいことか、よくわかっています。

例えば、私がずっと欲しかったものは、自分の部屋です。大阪は、12,100もの個室を用意します。これは、すべてのアスリートを収容でき、選手村としては、過去最大の数です。もちろん、個室を希望しない選手にも、2,600もの二人部屋を用意しており、合計17,300人の宿泊が可能になります。

そして、一人17㎡のスペースでは、スーツケースを飛び越えてベッドに、ということはありません。

私たちの選手村は、トレーニング用の施設、広い公園、一流の医療施設、そして娯楽エリアなど、多様な施設やサービスを提供します。言うまでも無く、選手村のセキュリティを保証するあらゆる手段を講じています。

1日の終わりには、大きなジャグジーに浸かりながら、大阪湾に沈むすばらしい夕日を眺める・・・実は、これが私の「お願いリスト」の一番のお願いでした。

そして、アスリートがみんな去っていった後、この選手村は地球にやさしい21世紀のモデル居住地区になるのです。

アスリート達は、エキストラ・オフィシャルが隣の区画に無料で宿泊することで、安心するでしょう。

パラリンピックは20競技会場で行われ、全会場は、バリアフリーです。

ちなみに、「パラリンピック」という言葉は、1964年、東京オリンピックで生まれました。それから半世紀、今回、大阪はパラリンピックに特別な贈り物をしたいと思っています。長野に参加したパラリンピック選手と話をしながら、パラリンピックに出場することが、多くの選手にとって、金銭的な負担になっていることを知りました。

大阪は、パラリンピック・チームの渡航費や機材輸送費を、負担します。この提案が、パラリンピック・ゲームの質の向上に貢献することを願っています。

ありがとうございました。

（磯村会長）

私は、大阪がオリンピックを開催するに相応しい都市だという絶対的な自信を持っています。その背景には、オリンピック招致に必要な条件が大阪にはあることに対する信頼があります。

大阪は、確固たる経済基盤を持っています。大阪市だけでも、年間予算400億米ドルを運用しています。400億米ドルといえば都市の予算として世界でも有数のものといえます。

これに関連して、インフラ整備にかかる計280億米ドルの資本投資が皆様をいささか驚かせたようです。しかし、大阪市の負担はたった12%、つまり35億米ドル未満であり、残りの88%は日本政府、大阪府、その他の組織が共同で負担するということを明確にしておきたいと思います。OCOGの予算は、20億米ドルになります。予算配分は既に確定しており、すでに多くのプロジェクトが進行中です。日本政府は、あらゆる努力をし、これらのプロジェクトが計画通り完成するよう保証します。また経済・ビジネス関係団体も、財政的な支援を確約してくれています。財政的問題は、全くありません。

日本経済は世界第二位の規模です。京都・奈良・神戸を含む大阪都市圏は、いわゆる関西地域と呼ばれていますが、地域内総生産が年間8,400億米ドルにのぼり、世界10位のGDPに相当します。このような状況を背景に、大阪は、大きなマーケティング・プログラムの可能性を提供します。

以上に加え、大阪には「ココロ」があります。日本語で「ココロ」は基本的に温かい心を意味しますが、平和や愛など、それ以上の理想や希望の意味も包含した言葉です。ボランティアの精神であり、人をもてなし、心から楽しませる気持ちです。「ココロ」は、人間関係における本質的な部分です。

私は、大阪でのオリンピック開催の願いには、大阪の人々が持つ「ココロ」の精神と哲学が生きていることを確信しています。

子供たちにオリンピズムの意義を伝えていくために、大阪は子供たちのためのプログラムを重視しています。大阪は1996年以降、学校の生徒を海外に送り、オリンピックや多様なオリンピック関連施設を体験してもらっています。

同じ考え方にに基づき、子供の入場券は最低5米ドルとし、また、ユースキャンプの海外からの400名の参加者の交通費・滞在費を負担することに決定しました。

(梁美沙さん)

私は14歳、中学校に通っています。

オリンピックは大好きです。オリンピックを見ていて、スポーツ選手と音楽家には多くの共通点があると思います。ただ一度のパフォーマンスのために、長い時間、また何度も繰り返し練習しなければいけません。音楽とスポーツはその意味で似ていると思います。

私は、大阪生まれで大阪育ちの韓国人です。シドニーで、南北朝鮮の選手団が一つのチームとしてスタジアムに入場行進しました。とても感激しました。スポーツの力を気づかせてくれました。オリンピックは本当に平和の架け橋だと強く感じました。

2008年には、私は21歳です。もし大阪にオリンピックが来たら、開会式でオリンピック讃歌を再び演奏することが、私の夢です。大阪はフレンドリーなまち、「ココロ」です。私は私のホームタウン、大阪が大好きです。是非大阪でオリンピック開催してください。

ありがとう。

(竹田JOC常務理事)

非常に高いレベルにある日本の運営能力について一言申し上げたいと思います。長野オリンピックのスポーツ・ディレクターとして、サマランチ会長が長野オリンピックをこのように評価されたことを、誇りに思いました。日本の強みは、徹底的な計画、迅速

な実行、過去の経験に裏打ちされた柔軟性の組み合わせにあります。長野を覚えておられますか。雪がいつまでも降り止まず、スラロームの競技の日程調整が非常に困難でした。けれども創造力を働かせ、迅速に実行に移すことにより、皆様にご満足いただける日程をつくることができました。

この長野の大会でも、日本の安全性の高さ、警備水準の高さはおわかりいただけだと思います。大阪では、この経験と、さらに21,000人にのぼる警察力をもとに、万全の態勢を整え、大会期間中の安全を保障します。

過去5年間に、大阪は5回の世界選手権大会、8回のオリンピック予選を含め、50回以上の国際競技大会を開催しました。一番最近では、5月に開かれた東アジア競技大会があります。長野で初めて導入された統合カード制度と、多くのボランティアの参加もあって、東アジア大会は大成功を納めました。

私たちはすでに準備を整え、さらに経験とノウハウを積んでいきたいと考えています。大阪の運営能力は、各国の選手によって高く評価されています。

（磯村会長）

現在、世界には60億の人々が暮らしています。みんな違う言葉を話し、違う文化をもち、違う環境で暮らしています。

オリンピックは、世界中から集まった人々が「世界市民」だと自覚する機会です。私たちは、オリンピズムを通じた相互理解の推進に向けた努力を続けることにより、世界に貢献したいと思います。

そのため、大阪はオリンピック期間中と大会後を含め、継続的な活動のためのレガシー計画を策定しました。そのうち、二つについて説明したビデオをお見せいたします。

しかし、2008年はまだまだ先です。私たちは、2003年にも、大阪の既存施設を世界のアスリートたちのためにトレーニングプログラムに利用することに着手したいと思いません。

旅費、宿泊、会場、コーチを提供します。

実際には、みなさん、世界各国のオリンピックであるこの会場にいる皆さんの助力を借りて、我々の目的であるスポーツを通じた教育を実現します。

これが、私たちの望む、私たちの「Sports Paradise for the World」です。

会長、友人の皆様。

大阪の招致計画作成を通して、私たちはオリンピズムが、未来の世代のためによりよい世界をつくるすばらしい可能性を有していることを深く理解しました。今日ご説明したとおり、大阪は、オリンピックを開催する能力を十分にもっています。我々の招致は確実です。私たちの意図は、オリンピックから何かを得るのではなく、純粹にオリンピックムーブメントのさらなる拡大・普及に貢献することです。このプレゼンテーションを通じ、オリンピズムの精神に対する大阪の信念をみなさまに理解していただけたものと確信しています。

ここに4世代の大阪人がいます。私が一番古い世代。太田大阪府知事、そして水野氏が第2の世代です。小谷さんが3世代目。そして美沙ちゃんが一番若い世代です。

大阪市民と大阪オリンピック招致委員会を代表し、ここに、オリンピック憲章及び開催都市契約を遵守することを誓います。また、ここで話した計画をすべて実行することをお約束します。

私たちのプレゼンテーションが、2008年オリンピックを開催する私たちの能力、決意、誠意を反映したことを確信し、また願っております。

プレゼンテーションを締めくくるにあたり、大阪に2008年オリンピック・パラリンピック開催の栄誉を与えていただけるよう敬意をもってお願い致します。

プレゼンテーションでの質疑（要旨）

1. アルバート王子（モナコ）

Q. 評価委員会報告によれば、会場の幾つかは遠いとあるが、変更計画はあるのか。

A. (磯村会長)

現実にはボートは、IFとの協議により変更した。IFと協議して、問題が起こらないように計画したい。所要時間は、新しい道路も建設中であるし、今よりはるかに短くなる可能性はある。

2. ムバイエ委員（セネガル）

Q. アンチドーピングコードが、2000年1月1日から発効した。これをすべての参加者に適用することを保証するか。YESかNOか。

A. (磯村会長)

ドーピングについては、厳しい認識をもっている。日本の医療研究水準は高い。出来る限りの努力をすることを誓う。YESである。

3. ポポフ委員（ロシア）

Q. セキュリティについて、地震対策は出来ているのか。

A. (磯村会長)

地震予知は、研究しているが未だ確実ではない。大阪は、今後10年間は、大きな地震の可能性は認められていない。日本は、法律で厳しく耐震構造を義務付けているので、地震が起こっても大きな危険性は低い。セキュリティについては、海上、地上すべてにわたり、責任をもって十分な体制を敷くので心配はない。